OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	松村, 智雄
Citation	阪大ふくふくセンター 研究・実践シリーズ 1　日本のなかの東南アジア ： 移民第2世代に注目して. 2026, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104096
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

松村　智雄

本書は，日本において移民が形作る社会を対象とするが，日本社会への移民の統合という政策学的な視点からの考察というよりも，さまざまなコンテクストを持つ人々が交錯する舞台として日本を捉えている。移民の中でも特に東南アジアを出身地としてもつ人々の日本を中心として作り上げられた関係性に注目し，各章それぞれの著者のフィールド調査に基づいて，その実態を多面的に理解しようとするものである。彼らが形成してきた地理的，あるいは民族横断的な開かれた越境的ネットワークの一部分を構成するものとして日本における彼らの活動を捉えるものとする。

従来日本は，外国から労働者を導入してきたのであるが，最近になって本格的に彼らの定住，そして日本を構成するメンバーとしての受け入れを進めるようになってきた。学校などさまざまな場面で，それにどのように対応すれば良いか，試行錯誤が進んでいる最中であり，この状況はまだしばらく続くであろう。現状がかなりのスピードで進行する中でその対応が追いつかないケースも発生することも大いに考えられる。これを鑑みても現状を質的調査によって分析し理解することは大変重要と言えるであろう。

このような問題意識を基底として，2024 年度東南アジア学会研究大会においてシンポジウム「日本のなかの東南アジア：移民第 2 世代に注目して」（大阪大学大学院人文学研究科附属複言語・複文化共存社会研究センター［略称：阪大ふくふくセンター］共催）が 2024 年 12 月 8 日に大阪大学箕面キャンパスにて開催された。このシンポジウムでのパネリストの報告を論考の形でまとめたのが本書である。

日本の現状

まず，日本の移民受け入れの現状について振り返ってみよう。特に東南アジア出身者に限定した上で，以下のように整理することができる。早期の移民にはフィリピンからの結婚移民があり，それは 1980 年代から進み，彼らは日本に定住し，第 2 世代，第 3 世代が育っている。日本における移民社会の中では比較的長い歴史的変遷を経験しているため，近年，特にフィリピン移民に焦点を当てた研究書も出版されている［高畑 2024］。この移民のパターンは，フィリピン人女性と日本人男性が家庭を形成するというもので，移民独自のコ

ミュニティを形成するよりも，最初は家庭ごとに日本社会（配偶者側の社会）に溶け込んで生活することが中心であったため，それほどコミュニティ化が進まなかったが，カトリック教会を中心にコミュニティ化が進み，それを基盤として民族横断的なコミュニティが形成された（第 4 章　永田論文）。

フィリピンからの移民が多い状況が続いていたが，2010 年代以降に労働移民という新しい形態が登場する。こちらは技能実習生のことで，特に近年ではベトナムが多く，2016 年にはフィリピン移民を上回った。この時期のフィリピンからの労働者（結婚移民ではない形態）も増加した。それ以降，日本滞在の人口でみるならばベトナム出身者が最多となっている。そのほかインドネシア出身者やミャンマー出身者はベトナム，フィリピンほどではないが，プレゼンスを示している。特に技能実習生（単身者）としてきた人々が今後，政策の転換とともに日本に定住するかどうか，そして次の世代はどのように育っていくのかが関心の的となっている。

研究の視角

特に「定住」を意識化すると，家族一緒に日本に生活し，その子どもが生まれ，日本で教育を受け，日本やその他の地域で仕事をするようになるということを見越して議論する必要がある。そうすると，すでに育ってきている，外国にルーツがある第 2 世代，第 3 世代の研究に歩を進める必要があるということになる。移民の定住の将来を考えるうえでの鍵となるのは，移民の子どもたちにあたる第 2 世代の日本における地位達成（そのようなバックグラウンドを持たない日本の子どもたちと同等かそれ以上の学業達成を成し得るか），そして，そのための条件とは何かを探ることだという指摘もある［永吉 2020］。このような問題意識はすでに共有されつつあるが，これに関する研究はまだ多くは積み重ねられていない状況である。

本書のアプローチに最も近いものに，ポルテスとルンバウトによるアメリカの移民社会の研究［ポルテス，ルンバウト 2014］と，その手法を日本に適用した日本の第 2 世代についての研究書，『日本社会の移民第二世代:エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』がある［清水ほか 2021］。

ポルテスとルンバウトによる研究書のアイディアの中核に以下に示す分節的同化（segmented assimilation）がある。ホスト社会への移民の同化は単線的なものではなく，自身が持つ様々な要素（その人やその集団を構成している様々な背景，それは出身国やその他

のルーツ，ホスト国における教育や交際関係など）がパッチワークのようになっているモザイク状をしており，しかもそれが動態的に変化し続けるという理解の仕方がされている。そこでは同化のプロセスが実際にはより複雑なものであるということが表現されている。

この分節的同化の考え方を日本の移民社会を分析するツールとして利用した［清水ほか2021］においては，移民の親と子どもが日本への同化志向を持っているかということと日本における子どもの学業達成にどのように影響するかが分析対象となっている。親子で同化志向が強い場合には，情報収集にも熱心であるため，子どもの学業達成に問題はない。また親が同化を拒否しているが子どもは同化した場合，あるいは子どもも親も同化を拒否している場合には，日本社会で孤立する可能性が高い。両文化をうまく取り混ぜて子育てする場合には，自文化をベースにしつつ日本の諸制度や文化についても積極的に学び取り入れていくため，バランスの良い成長，日本での学業達成もなされるのに加えて，日本文化以外のものが強みになり，日本国内外で活躍することが可能になり，複文化的状況がプラスに働くことがある。

この研究書における重要な発見として，上記のほかに行政や地域社会の支え，積極的なアプローチによって，この複文化の良さが生かされることがある。日本社会に対峙する移民家族という二項対立の構図の中で，一方が一方に同化するというのではなく，その間にあるインターフェイスとしての，出身国は違っても，同じような環境にある移民の仲間の存在，行政や地域のコミュニティなどが彼らの支え，居場所となり，自文化の過度な否定や過度な同化ということでなく，バランスの取れた形での日本社会への適応と多文化共存が果たされることがあるというのだ。これは「構築型文化変容」と名付けられている。第1章　近藤論文で示されるのはまさに，このインターフェイスに関するものであると位置付けることが可能であろう。

この類型で言うと，明らかに望ましい形は，バックグラウンドとなっている文化と日本文化の共存であるが，実際の人々の生活では，日本人や移民のコミュニティが交錯するインターフェイスがその形態は多様であるが存在しているため，いかにそれが機能しているのかを観察し，それについて理解を深めることが建設的な議論につながるだろう。

本書に含まれる各論考はまさに，このインターフェイスを実際に間近で見て研究を行ってきた著者によって書かれており，これまで統計学的に，あるいは政策学的に議論されてきた移民が実際にどのような環境で，そしてその環境に働きかけながら生きているのかを理解するのに有益だろう。

まとめると，本書では，移民の社会統合の問題をホスト国家とのための議論に帰するというよりも（この分野にはすでに研究の蓄積が存在する。［国立社会保障・人口問題研究所 2022］［是川 2019］など），当事者，外国にルーツがある人々が日本社会をベースにしてどのように生活しており，彼らを主語にした場合にどのような課題が当事者によって認識されているか（あるいは当人にも認識されていない課題があるかもしれないが）という点，それがどのように克服されうるのかという点に焦点を当てるという目的が共有されていると言ってよいであろう。

さらに本書では，日本における外国にルーツをもつ人々が中心となって，あるいは日本人と渾然一体となって作られる社会の諸相についての分析もなされている。大阪のインドネシア人が多く集うキリスト教会，京都のフィリピンからの移民を中心としたコミュニティ形成などである。

本書の構成

本書は以下，5 つの論考から構成されている。それぞれの論文の内容について簡単に紹介する。

第 1 章　近藤美佳「ベトナムにつながる子どもたちの『認識されないもの』を取り戻す試み」においては，日本において，東南アジア出身者の中では現在最多となっているベトナム移民（60 万人以上）に焦点をあてている。1970 年代末に「難民」として入国した人々とそれ以降の留学生等がなす二層構造に，2010 年代以降，労働移民が重なった状況，そして日本における在住外国人への教育支援体制，ベトナムの海外在住ベトナム人に対する姿勢も大きく変化する中で，公立学校内に設置された母語教室での実践の分析を通して，彼らの母国や家庭におけるベトナム文化実践の中に，うまく説明されないもの，存在しても子どもたちに「認識されないもの」があることが指摘されている。そして，それが学校での実践によって，子どもたちにリアルに感じられる，再認識される，腑に落ちる形で理解される可能性について議論している。これは，まさに先行研究［清水ほか 2021］において，日本で顕著とされている構築型文化変容の一類型であり，学校が移民家庭と日本社会をつなぐ有力なインターフェイスとなりうることを示すものである。具体的にこの章で議論されるのは，自身の経験を語るための言語や，経験を語る場，共有する他者が不足している子どもたちの状況である。そのような子どもたちに対して母語教室は，子どもと保護者が持つすべての言語資源を活用し，子どもが持つ経験や記憶を言語化，知識化する場所とし

て機能することが可能であるし，子どもたちがそれらを自分の言葉で語ることができるように支援できるという。

第 2 章　梶村美紀「日本定住ビルマ／ミャンマー人 2 世および 1.5 世のアイデンティティ形成－『出自へのこだわり』と『日本への親近感』に着目した世代間比較－」では，日本に定住するミャンマー人の第 2 世代と，日本生まれではないが，日本に幼少期に移住してきた 1.5 世代を主な対象として，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」という二つの分析軸を用いた世代間比較から，定住化の動態が考察されている。第 2 世代はミャンマーでの居住経験は限定的であるが，家庭での言語使用や宗教・伝統行事の継承を通じて出自意識を形成し，日本社会への親近感や帰属意識も醸成されている。しかし，その一方で名前や外見といった可視的な属性によって「外国人」として一律に線引きされ，日本への愛着の表明にも葛藤を感じているという。

また，こうした二元論的な枠組みに違和感を抱く第 2 世代が，自らの位置付けを再構成していく過程に着目し，「日本人か外国人か」という既存のカテゴリーを超え，「ミャンマー系日本人」という複合的な自己認識を選択し，能動的に名乗る可能性，国籍についての固定観念を超え，ミャンマーへの帰属意識を持ちつつも，日本で独自かつ多層的なアイデンティティを形成していることが指摘されている。

第 3 章　矢元貴美「フィリピンにルーツを持つ子どもの『つながり』の活用」では，フィリピンにルーツを持つ子どもたちのうち，第 2 世代や第 1.5 世代が，日本の学校や社会をどのように捉え，彼らの背景や経験，フィリピンや日本との繋がりをどのように活用して生きていこうとしているかに注目し，その上で，彼らがその選択をした要因として日本側の認識がどのように関わっているかを検討している。日本で暮らす彼らの移動の経験，滞日期間，言語運用能力，学習歴，保護者の背景や親族との関係は多様である。彼らがフィリピンの言語を保持・向上させる動機は全体的に高くはなく，フィリピンに関わる人間関係の保持・形成については彼らの間で相違が見られる。フィリピンで暮らす親族との関係や日本で同じフィリピンにルーツを持つ者とのつながりを持っているか否か，ルーツを日本で「売り」にするかどうか，生活拠点としてどの国を選ぶのかには，保護者の方針や態度のほか，日本の学校や社会における彼らへのまなざしが影響を与えているという。

第 4 章　永田貴聖「在日フィリピン人たちのトランスナショナルな実践―調査者の位置も交差させて」においては，京都市南区東九条に集うフィリピン人たちが展開する「フィリピン」という国家・民族を通じた紐帯を基盤として，移住社会のマジョリティや，他国

出身の移住者たちと関係を形成する「トランスナショナル」な生き方が取り上げられている。

日本にはカトリック教会等を基盤とするなどしてフィリピン人移住者当事者互助グループが多く存在している。これらは，来日してすぐのフィリピン人にとっては，日本社会とつながる機会となり，長年日本に在住するフィリピン人にとっては「フィリピン」とのつながりを通じて，他国出身の移住者たちと関わり，複数のナショナリティとエスニシティが交差させる実践を展開する契機ともなっているという。

第 5 章　中谷潤子「インドネシア人教会というコミュニティの様相とその変容」はインドネシアの移民をテーマにしている。在日インドネシアコミュニティについてはあまり知られていないが，しかし今後，インドネシアからの移民の増加が見込まれることから研究の必要性が高まる分野と言える。2024 年 12 月の在日外国人数約 380 万人のうち，インドネシア人は約 20 万人で，全体の約 5% である。在日インドネシア人は技能実習生と特定技能が約 7 割を占めており，多くは 5 年以内に帰国する。そのため，インドネシア人集住地域やコミュニティは目立つ存在であるとはいえない。

しかし一方で，日本社会に根を下ろそうとするインドネシア人の姿も目にするようになってきている。本論考では，インドネシア人による宗教コミュニティに着目している。大阪にはインドネシア人設立のモスクのほか，複数のインドネシア人教会がある。継続調査を行ってきたインドネシア人教会は，在日インドネシア人にとっての大切な居場所であると同時に，日本人の参加とともに，その形が変容している。このインドネシア人教会を中心に，コミュニティの様相を明らかにすることで，宗教コミュニティとして，在外コミュニティとしてのあり方について検討する。

それぞれの論考を通して，最初に述べた日本社会におけるインターフェイスの存在と，彼らの特性を生かしながらの日本への適応，さらにそれに加え，自身が持つ文化・言語が持ち味として生かされる方向性，そこへ至るための方途，そして課題が具体的に示される。

謝辞

この書籍の元となったのは 2024 年の東南アジア学会でのシンポジウムである。この企画のアイディアを最初に編者に提案され，実際のシンポジウムの運営，その内容の書籍化の過程において，常に編者を援助してくださった菅原由美先生（大阪大学大学院人文学研究科）に心より感謝いたします。

参考文献

アレハンドロ・ポルテス・ルベン・ルンバウト．2014.『現代アメリカ移民第二世代の研究：移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.

王柳蘭・山田孝子．2023.『ミクロヒストリーから読む越境の動態』国際書院.

梶村美紀．2018.『「ビルマ系日本人」の誕生とそのエスニシティ：多民族な社会と新たな連帯』風響社.

国立社会保障･人口問題研究所編（田辺国昭･是川夕監修）．2022.『国際労働移動ネットワークの中の日本：誰が日本を目指すのか』日本評論社.

是川夕．2019.『移民受け入れと社会的統合のリアリティ：現代日本における移民の階層的地位と社会学的課題』勁草書房.

佐々木てる編．2016.『マルチ･エスニック･ジャパニーズ：〇〇系日本人の変革力』明石書店.

清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平．2021.『日本社会の移民第二世代：エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店.

高畑幸．2024.『在日フィリピン人社会：1980 〜 2020 年代の結婚移民と日系人』名古屋大学出版会.

永田貴聖．2011.『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版.

永田貴聖．2020.「2 つのトランスナショナル：フィリピン人移民研究からの視点」『移民研究年報』26: 51-64.

永吉希久子．2020.『移民と日本社会』中央公論社.